

trivia ■皮膚科のトリビア■ 135

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで聞きしたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

便秘薬の使い分け

第131回日臨皮三ブロック合同学術集会から(平成27年11月30日)

便秘の病態は1つではないので薬剤の使い分けが必要。上部消化管膨満感が強い場合はガスモチン、下部消化管の動きが悪いときはセンナ、プルセニド、便が固いときはマグミット、マグラックス(水と一緒に飲まないと意味がない)、肛門が締まっているときはレシカルボン坐薬。マグミット、マグラックスは長期投与で高マグネシウム血症をきたすので血清マグネシウム値を測定すること。4.9 mg/dl以上で臨床症状が出現。初期症状は悪心、嘔吐、徐脈、起立性低血圧、皮膚潮紅、筋力低下、傾眠などである。「使い分けは意識していなかったの、参考になった。ちなみに、帯状疱疹後神経痛でトラマドールを用いるときには、便秘に対してセンナかプルセニド、吐き気にはナウゼリンを最初から併用するとよいとのこと。高マグネシウム血症の症状に皮膚の潮紅というのがあるらしいが、経験がない。遭遇しているかもしれない」。

トコジラミの刺し口が「2つ並ぶ」は本当か

第149回神奈川県皮膚科医会例会から(平成27年12月6日)

トコジラミの吸血実験。吸血時間は7分から27分で、平均は15分。11回の観察のう

ち9回は1回の吸血だけで刺し換えなし。2回以上の刺し換えは2回。すぐ横に刺し換えがあると、刺し口が2つ並ぶという伝説の症状になる。なお、刺された回数と皮膚の反応に関しては、初回から3回目までは無反応、4回目は吸血の24時間後から紅斑が出現し、48～72時間後がピークの遅延型反応になる。通常の臨床では、刺されたあとに残った微量の抗原に対して、感作に6～15日を要するとされ、刺されてから2週間後に発疹が出現することがまれでない。「皮膚の症状は、蚊に対する反応と一緒に、最初は無反応、感作されてまず遅延型反応、刺され続けていると次第に即時型反応に変わってきて、最後は無反応となる。簡易宿泊施設で刺され続けていた利用者は、最後は刺されても症状が出なくなったとのこと」。

柱のシミはトコジラミの巣かもしれない

第149回神奈川県皮膚科医会例会から(平成27年12月6日)

トコジラミが部屋の中に定着し繁殖すると、柱や障子の隙間に巣を作る。昼間はこの巣に潜んでいて、夜になるとモゾモゾと降りてきて、吸血する。巣に戻るときにフンをするので、茶褐色のシミになるのが特徴。「巣を見つけたら、成虫を殺虫剤で駆除するのだが、通常のピレスロイド系殺虫剤には抵抗性で、カルバメート系殺虫剤のプロ

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥
Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス：

<http://www.asai-hifuka.com>

ボクスルが主成分の“バルサンまちぶせスプレー”かオキサジアゾール系殺虫剤のメトキサジアズンを含んでいる“トコジラミゴキブリアース”、“ゴキジェットプロ秒殺+まちぶせ”がおすすめとのこと」。

ダニが媒介する STARIという疾患

第149回神奈川県皮膚科医会例会から (平成27年12月6日)

米国南東部、テキサス州からカリブ海～大西洋沿いにメイン州までに分布するダニ媒介感染症があり、southern tick-associated rash illness (STARI) と呼ばれる。背中に1つ白い点があるlone star tickというダニが媒介するが、Lyme病の病原体であるBorreliaとは関連していない。症状は刺され口を中心に遠心性に広がる紅斑で、Lyme病に似る。全身倦怠感、発熱、頭痛、筋肉痛を伴うこともある。日本ではタカサゴキラマダニ刺症後に遊走性紅斑が出現した例がある。Lyme病の原因となるシュルツマダニがいるのは北海道と本州中部の高地なので、その生息地以外で遊走性紅斑が生じた場合はTARI (tick-associated rash illness) と呼ぶのがよさそうだ。

「ダニ媒介感染症も全世界的にいろいろとあるようだ。STARIは米国CDCのホームページ (<https://www.cdc.gov/stari/>) に解説があつて、lone star tickや皮膚病変の写真も載っている」。

日本人の脂腺癌は 眼瞼以外に多い

第864回日本皮膚科学会東京地方会から (平成27年12月19日)

脂腺癌は欧米の教科書には3/4が眼瞼に生じるとされている。眼科を含む皮膚科以外の診療科からの検体を扱う本邦の施設での集計では、脂腺癌と診断した症例は、眼瞼が21例、眼瞼以外の頭頸部25例、頭頸部以外が14例で、眼瞼外発生例が2/3を占めた。人種による差がこの結果を反映していると思われる。

「脂腺癌といえば、マイボーム腺癌だと思っていたので、眼瞼外、とくに鼻の周りが多いという印象はなかった」。

